AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2020.3) 令和元年度:9.

がんと診断された時からの緩和ケアとエンパワーメント

尾崎 靖子, 笹田 豊枝, 澤田 裕子

がんと診断された時からの緩和ケアとエンパワーメント

旭川医科大学病院　腫瘍センター　緩和ケア診療部　〇尾崎靖子　澤田裕子　笹田豊枝

【はじめに】

がんと診断された時点から、疼痛コントロールに難渋したが、チームアプローチによる全人的支援によって、患者のエンパワーメントを支援した事例を経験したので報告する。

【事例】

A氏60歳、男性、左腎集合管癌stageⅣ、一人暮らし（離婚、子供2人）、化学療法のため入院予定であったが腰背部痛が増強し、疼痛緩和目的で入院となりPCTに依頼があった。入院後、並行して化学療法も実施され、支持療法に関する支援も行った。疼痛コントロールは内臓痛に対してオキシコドン持続皮下注射に変更したが効果が無く、フェンタニル持続皮下注射にスイッチしタイトレーションを行った。A氏の生活を想定し目標を共有しながら疼痛コントロールを行い、フェンタニル貼付剤・即効性製剤を導入し、退院可能な状態と患者自身も評価した。その過程で、不安や気がかりの言語化が困難であることを共有し、エンパワーメントアプローチを実践し支援した。病気との向き合い方、今後の療養方針、家族との共有に関する支援が必要と判断し、病棟看護師と共有しながら、患者への直接・後方支援を行った。退院後も継続的に支援し、疼痛コントロールに関するセルフケアを支持するとともに、ACPを想定した今後への話し合いを行うに至った。

【考察】

チームアプローチによる早期からの緩和ケアは、全人的苦痛の緩和をもたらした。その過程で形成された信頼関係を前提に継続的な対話を行い、患者の認識や行動変容の促進につながったと考える。